

緑爽会会報 No. 154

2018年2月26日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜

懇談会/忘年会

開催日：2017年12月16日（土）14時～

参加者：26名（写真参照—田村さんのお話の後、忘年会前に）



（後列）荒井正人、夏原寿一、深田森太郎、石塚嘉一、西谷隆亘、小原茂延、藤下美穂子、小清水夫人、森武昭

（中列）松本恒廣、吉田理一、梨羽時春、渡部温子、瀬戸英隆、渡邊貞信、西谷可江

（前列）島田稔、関塚貞亨、富澤克禮、田村佐喜子、鳥橋祥子、山本良子、川嶋新太郎、田井具世、田邊壽

田村佐喜子さんのお話「松本に住んで、山あれこれ」

田村さんのお話を話題ごとに以下の通り纏めました。なお、当日配布された「穂高小屋関係を主とした略年表」と、田村さんがお書きになった「日本山岳会信濃支部報45号と65号」とを照らし合わせると、よりわかりやすいかと思います。（必要な方は荒井宛お申し出ください）

お話の後は写真のように皆様から頂いたお酒、渡部さん手作りの御馳走などで忘年会へ。スペースの関係で、この時の様子は割愛させていただきますが、例年通り大いに盛り上がりました。

<はじめに>

塩尻峠のすぐ横を入ると、五千石街道という、昔よく朝な夕なに展望台だねって眺めた場所があります。奥穂や槍、そして常念は鋭角に見えて素敵な立体感で、白馬の果ての方まで見えるし、安曇平や松本平も一望の下。ほんの10日ほど前も諏訪の帰りに眺めてきました。眺めながら今日のお役目をしなくてはと思いました。そんなことで松本に住んで山あれこれと題してお話しします。

紀美子平の話が何かで出て、紀美子さんは幼い時から知ってるよと言って、やたらしゃべっているうちに、じゃ話をしようという羽目になったのが今日の発端です。(昨年のロジ山旅の談話室でのことと思われまます=編集部)

<松本へ。そこでの暮らし>

お話しするには自分の恥も晒さなきゃいけないので正直にお話しします。

私は東京深川の生まれで昭和19年に疎開したのが松本。以来73年。山に行きだして70年弱。城下町の松本では「よそものの嫁」と言われながら居座って56~7年になります。私は5人兄弟の長女で、下はみな男。だから母が病気にでもなると私が母親代わりをすることになり、学校どころではありません。昭和7年生まれは当時の学校制度では旧制女学校。クラス担任は熊井啓さんのお母さんで、校長先生が奨学金のことも話してくれたけれど、父は「人様の金で娘を学校出すほど落ちぶれちゃーいねー」って。それで翌日から働きました。12か13歳でした。

働くところは師範学校女子部の予科と一緒に。それである頃は皆遊びも一緒に、スキー、テントもザックも道具を借りに来る。私が貸し出し係だったからよくわかる。それでよく出かけました。

<山にかかわりのある方々に恵まれて>

結婚してからの勤務先は信大理学部地質学教室でした。「日本アルプス」を書かれた火山学の小林国夫さんなど、その分野では最先端を行ってましたから何か起こると情報がすぐに入りました。焼岳の噴火(昭和37)など、様々な出来事は、こどもの年齢でわかります。

お金はないから山に行っても、縦走のときなど上高地でコメを売って帰りのバス代にしたり、五千尺旅館のおばあちゃんに徳本を越えるからおにぎり作ってと頼んだりしました。黒田初子さんのことや、山に来る学生は今に出世するから大事にきなさいとか、女は表に出ちゃいけないとか、言われました。西糸屋の帳場では、お茶入れてほしいなあ、そういう身分に早くなりたいなあなんて思いながら、聞くともなく聞いていたから、マナスルのことや松涛明のこととかも知っていました。また松本では山の関係者が姻戚関係にあったり、近くに五千尺や西穂山荘の方が住んでいたのも、山に関する情報もいち早く入ってきました。そういう環境には恵まれていました。

<歩くのは速かった>

仕事では通勤に往復16~7キロ歩いてたし、子供ができてからも背負って仕事をしてたから、娘はそれが基礎にあるから今でも歩けると言います。表・裏銀座もよく行きました。伊藤新道が出来て日程も短縮されて雲の平を独り占めしたこともあります。三俣小屋から走るように歩いて昼には槍ヶ岳について、槍沢を下った時は、奥又の出合で女性二人が泣いていて、仲間が屏風で宙づりになった、帰されたがどう帰ったら良いかわからないというので、連れて五千尺へ引き渡して帰りました。井上靖の「氷壁」になった事件です。その前に濁の小屋で殺人事件があった後に烏帽子へ行った時は、襖に血痕がついていて怖かったです。ブナタテ尾根を登って烏帽子小屋に泊まったが、どこをどう帰ったか覚えていないくらいです。

<信濃支部のこと>

ウェストン祭のお手伝いをしていたこともあります。土砂降りの中、女二人での野営を高山支

部長に諭されて西糸屋送り込まれたことで縁ができました。父からは山岳会などもってのほかだと言われていましたが、家族は横浜に帰ってしまったので、これ幸いとばかり山を続けてきました。

<ウェストン祭のこと>

昔は素朴なものでした。尾崎先生が講演をされてましたが、亡くなられてからは朗読や献花などはキレイな人たちがやってました。ある年に当時の中野支部長から私にやれと言われてました。上高地の美しい景色には美人が合うが、世紀末の悲劇でお前やれと言うんです。本当に2000年のことですが、説得の殺し文句は「お前が出れば、後の人が出やすい」。迷ったけど、詩を選んだり、あのウェストン碑が埋め込まれている岩の説明（日本で最も古い岩とのこと）をやらせてもらえるならとわがまま言って3回引き受けました。

<恒さんのこと>

会報 No. 151 に書かせていただいた恒さん。実は恒さんとは、こども同士が小・中と同じクラスで、PTA で一緒でした。皇太子様のご成婚される前に常念小屋にお泊りになられた。その少し後に、恒さんから、あの時よりも待遇良くするから来いと言われて行ったこともありました。（以下は質問時間のお話し）中野支部長から私が90歳になったらお祝いしてやるけど、どこがいいと尋ねられたので、常念がいいと言うと、恒さんは「俺はジジババ軍団はだめだ、若いのを連れてくるなら話は別だ」ですって。（一同笑）

<重太郎さん>

昭和28年のウェストン祭の後の山は奥徳高で、登っていくと上の平で重太郎さんが道を整備します。奥さんも割烹着で砂利を運んでましたが、そのそばで、紀美子さんは3歳位でしたか、飛び回っていました。小屋では、おてしよに酒粕を練ったのを載せて、それを肴に囲炉裏端で重太郎さんがドブロクを飲んでる。そこで、女なのによく来たなといろんな山の話、自慢話を聞きました。山頂のケルンで3180m+3mとなり日本で2番目だ、環境庁に怒られたが、そんなこと知らずか（知るか）！とか。

<最後に>

もうこの歳になり、登れない山が年々多くなりましたが、ずっと山にスキーにと、今もこうして続けてこられたことは本当に幸せです。娘からは、賢い人はこういう家には来ない。賢くないから来たのだし、よそで愚痴を言っちゃあいけないと言われてますが、賢くないことを晒してお話ししました。お聞きいただき、本当にありがとうございました。

初詣山行・丹沢「弘法山」

実施日：1月20日（土）

参加者：11名（後掲の写真参照）

緑爽会2018年最初の山行は、初詣山行としての弘法山。ここ数年は七福神巡りを行っていた。これからは会としての山行を始めとして、計画書の届け出が必要となる。その点でも新しい形での幕開けとなった。朝のうちは天気が懸念されたが現地では大変良い日和となった。

参考コースタイム：鶴巻温泉（10時）→吾妻山（10時15分～25分）→途中休憩10分→山頂（11時30分～12時10分）→権現山（12時25分～13時）→下山（13時35分）

サブリーダーの瀬戸さんと、石塚さんにこの山行を振り返っていただきました。

因縁の山「弘法山」

瀬戸 英隆

参加11名の先頭を歩きながらふと思う。たぶん荒井氏から何か書けと指示が来るだろう。何をどう書くか、考えているとつい速足になる。途端に後方から声、「瀬戸さん速いよ」。振り返ると皆さんずいぶん長い列になっている。申し訳なし。うむ、こんな調子で書くか。荒筋が決まった。

約25年前、ちょうど60歳の私は、脱サラして始めた商売に失敗し、失望の世界をさまよっていた。毎日本ばかり読んでいる私に妻が言った。「山を忘れたんですか！何処か登ったら、、、私も一緒にします。」

選んだ山が弘法山だった。鶴巻温泉駅前から歩き出し、「陣屋」という旅館の横を通る。この旅館は将棋の名人戦に使われる旅館で、生田に居住していた中原誠氏も毎々登場していた。道は高速道路の下を通り、農家を右に見る。東屋がでてくれば吾妻山だ。間もなく善波峠を過ぎ弘法山頂上に至る。これが60年前。仕事に追われ、残ったのは銀行への負債のみ。でも頂に立って改めて思った。「俺には山がある。中1から登っている山がある！」と。生活も考えず再び山を思い出した、この男に妻は絶望していたのか？

長い11人の列は頂上近くまで来ていた。途中で初参加の小林氏のために自己紹介する。今日の山行は会として初めて本部に対する計画書の提出等もあり、リーダー夏原氏のご苦勞が察しられた。

話は戻る。60歳の登山から齢を重ねて毎月登って来たが、この山はすっかり忘れていた。それが約2年前の、思い起こすも笑いが出る再登頂となった。平成28年3月17日だった。詳しくは会報143号をお読みいただきたい。そしてもう1回。昨年12月、厚木から広沢寺温泉を経て鐘ガ嶽へ行く心算が、市内でモタモタしていてバスに乗り遅れ、急遽この弘法山に目的地を変更。慣れた山域を、この日ばかりはトボトボと歩いたのだった。

冬枯れの雑木林に行く弘法山初詣山行

石塚 嘉一

弘法山という名前がいいので、何となく正月らしくて楽しみにしていた。

この日の初詣山行を担当された夏原さんが鶴巻温泉駅北口の前の交番に登山届を出して、温泉の宿の間をぬけ、登山口に向かった。

いきなり急な登りを行う。サブリーダーの瀬戸さんを先頭に、リーダーの夏原さんが最後尾で、樹林帯の中を歩く。ゆったりしたペースなのにあっという間で、吾妻山(125m)の小さな頂上に着く。日本武尊を祀る吾妻神社の石碑の前で小休止。自分のために身を投げて海を鎮めた弟橘比売を偲び、日本武尊がここで「吾妻はや」と詠んだという伝説を吾妻山の説明板で紹介している。

厚着をしてきたので、フリースを脱ぐ。みんなおやつを交換。島田さんが、外国のしゃれたキャンディをみんなに配られた。お菓子を食べながら雑談する。みんな笑顔だ。

吾妻山からしばらく尾根を下って、緩いアップダウンを40分ほど続けたあと、善波峠の分岐に出合う。大山へ続く道の向こうをしばらく眺めていた。江戸時代からの大山参詣道の昔を思う。

弘法山へはここから急な山道を登る。クヌギとミズナラにイヌシデが混ざる雑木林の間の山道。冬枯れの山。落ち葉を、踏みしめて、ときどき蹴散らしながら、歩く。すっかり葉が落ちた枝の間

から、青空が見え、木々の間に山々がよく見える。冬枯れの山歩きの好きなところだ。いくら歩いても右向こうには丹沢の山々、大きな大山がいつまでもそこにある。

弘法山の頂上で、弘法大師の旧跡に建った釈迦堂に思い思いに初詣。江戸時代に釈迦如来像と弘法大師像を祀った釈迦堂だったが、火災で釈迦像が焼失、石造りの弘法大師像は残った。再建された今の堂には弘法大師の木像だけが祀られている。秦野の町が見える陽だまりに座ってみんなで弁当を広げる。和やかなひととき。2日後に東京に大雪が降るとは想像できない暖かさだった。弘法山の標識の前で記念写真を撮って、権現山に向かう。



(後列左より) 小林敏博、小清水敏昌、瀬戸英隆、富澤克禮、島田稔

(前列左より) 石塚嘉一、田井具世、鳥橋祥子、夏原寿一、大島洋子、小原茂延

桜の木が並ぶ広い馬場道を下ってまた上るとすぐに権現山だ。昔、周辺の農民が草競馬を楽しんだので馬場道というそうで、嬉しくなった。

弘法山公園の最高峰、権現山(243m)で展望台にみんな上り、秦野の町や遠く相模湾から房総半島の方まで、そして表丹沢の山々の展望をしばらく楽しんだ。大山だけでなく、ヤビツ峠や塔ノ岳が同定できた。

秦野木綿の上に「自然がずんずん体のなかを通過する一山、山、山」という前田夕暮の短歌を印刷したプリントを小原さんが配り、この頂上の広場に立つ大きな石の碑の前でこの秦野出身のすごい歌人のことを説明された。山歩きだけでなく、緑爽会らしい山行になった。大きな石の碑には、「生くること かなしと思う山峽(やまかい)は はだら雪ふり 月照りにけり」とあった。(この山峽にぼたぼたと雪が降り、寒月が照らしている。生きていくことが切なくいとおしく思われることだ。)

権現山から急な下りを、浅間神社の小さな石の祠がある浅間山を過ぎて、秦野の町に下りた。途中、大きなロウバイの株が花盛りでうっすらと香りが匂った。「弘法の清水」に立ち寄る。豊かな水が湧き出ている。秦野盆地湧水群の一つだが、弘法大師が杖を突いたら湧き出したという、各地にある弘法大師の伝説の清水。秦野駅の「庄屋」で反省会をして解散。

はいつなのか、あるいは、どうして手にすることができたのかについては何も語っていない。

『山岳』第一号第一号に、武田久吉の「尾瀬紀行」が載っている。そこでは尾瀬に関する情報として「植物学雑誌に掲げられたる早田氏の一文を知るのみ」と書いているものの、『ハンドブック・フォア・ジャパン』については何も触れていない。しかし、24年後に『尾瀬と鬼怒沼』（昭和5年、梓書房）に書いた「初めて尾瀬を訪う」は、「尾瀬紀行」を改稿したもので、そこでは早田レポートとともに『ハンドブック・フォア・ジャパン』にも触れている。「尾瀬紀行」で『ハンドブック・フォア・ジャパン』に触れなかったのは、その頃の武田久吉には、同書の入手の経緯を詮索されることを避けた心理が働いたからではないだろうか。

父親の思い出の地

『明治の山旅』には、父親と旅行したと明記している場面が一か所だけ登場する。「明治三十九年の五月末から六月にかけて、思いも掛けず、父に連れられて初夏の日光を訪うこととなり、…中禅寺湖ではレイクサイドホテルに泊まり、湯元ではナンマホテルに泊まるといった旅行で…」と、さりげなく書き、父親についての具体的な記述はない。それは、アーネスト・サトウが清国公使を離任して本国へ帰る途中に日本に寄ったもので、乗船予定の船が食中毒防疫のため出航が1週間遅れることになり、その機会を捉えての日光への旅行だった。父子は湯滝の上まで一緒に登った（※5）。サトウは62歳、最後の日本であり、父子それぞれに感慨深いものがあつたはずである。

誰も他人には覗かれないことがあるもので、私にはそれを暴き出して喜ぶような趣味はないから深入りはしたくないが、武田久吉研究に際しては避けて通れないところである。

アーネスト・サトウは白根山、大真名子、小真名子、男体山、赤薙山、女峰山など日光周辺の山に登り、その登山案内を『ハンドブック・フォア・ジャパン』第2版に書いた。武田久吉もその20年ほど後に、父親の足跡を追うように、珍しい植物を探しながら日光の山に登ることになる。

武田久吉にとっての日光は、植物採集という趣味が昂じて、植物学を生涯の研究テーマとすることを決定づけ、高山植物を通じての人脈づくりの場所だった（※6）。そして、何よりも父親の思い出が色濃く残る場所だったが、そのことは自分の胸に秘めて、多くを語ることはしなかった。

※1. 東京外国語学校の卒業生名簿では、武田久吉は明治37年の独語学科選科修了生となっている。明治40年4月札幌農学校講師として赴任するまでの間を指して、小島烏水の弟・栄は「当時浪人学生だった武田久吉君が…烏水邸を訪問…」と書いている（『近代登山の先駆者たち』）。

※2. アーネスト・サトウの別荘は後に英国大使館の別荘になり、2010年日光市に譲渡された。改装されて2016年から英国大使館別荘記念公園として一般公開されている。

※3. ※5. 『駒沢女子大学研究紀要』第16号掲載・井戸桂子「アーネスト・サトウにとっての日光中禅寺湖」による。

※4. “A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan”〈中央部・北部日本旅行案内〉のsecond editionは700ページの大冊で、原著は本会図書室にもないが、庄田元男氏の全訳で『明治日本旅行案内』〈上・中・下全3巻〉として1996年平凡社から刊行されている。『明治日本旅行案内』と『日本旅行日記』（1992年、平凡社東洋文庫）から、山岳に関する記述を抜粋・編集した『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』が2017年講談社学術文庫として刊行された。

※6. 日光の萩垣面（はんがいめん）には画家・五百城文哉（いおき・ぶんさい）宅と庭が今も残っている。城数馬は収集した高山植物を五百城文哉宅の庭に植えてもらい、それを見るのを楽しみにしばしば日光を訪れた。武田久吉は高山植物収集趣味を通じて知り合った城数馬に、後に山岳会設立に際し、発起人の一人になってくれるよう依頼することになる。

